

[研究報告]

2014年度リコンディショニングルーム活動報告と今後の展望

辰見 康剛¹⁾, 篠原 純司¹⁾, 有吉 晃平²⁾, 栗谷 健礼¹⁾, 中村 奈菜¹⁾

Reporting of 2014 Reconditioning Room Activities and Future Prospects at The Kyushu Kyoritsu University

Yasutaka TATUMI¹⁾, Junji SHINOHARA¹⁾, Kohei ARIYOSHI²⁾,
Takenori AWATANI¹⁾, Nana NAKAMURA¹⁾

Abstract

The Reconditioning Room (RCR) provides athletic training service to the student athletes at Kyushu Kyoritsu University. The RCR also functions as an internship site for the student athletic trainers who will be taking board certification exam for the Japan Sports Association. This article reported that the detailed function of the RCR for the student athletes as well as student athletic trainers. This article also described that the future prospects to provide better athlete care and better athletic training education for the students at Kyushu Kyoritsu University.

KEY WORDS : athlete care, training, education

1) 九州共立大学スポーツ学部
2) 大阪体育大学体育学部

1) Kyushu Kyoritsu University, Faculty of Sports Science
2) Osaka University of Health and Sport Sciences, School of Health and Sport Sciences

1. はじめに

九州共立大学リコンディショニングルーム（以下、RCRとする）では、学生アスリートを対象にスポーツ傷害相談を行っており、同時にアスレティックトレーナー（以下、ATとする）を目指す本学スポーツトレーナーコースの学生に対する実習活動も行っている。

この実習活動は日本体育協会公認ATの資格取得を目指す学生に対する養成カリキュラムである。そのため、スポーツ傷害相談は日本体育協会公認ATの資格を有する本学スポーツトレーナーコースの教員が行ない、学生トレーナーは教員の指示のもと補助活動を行っている。その補助活動の一つとして来室状況の記録を学生トレーナーが行っている。

来室状況の記録は、日々の来室者記録と初回来室時の記録、個々人の継続的な来室記録を行っている。これらの記録は、RCRの運営における傾向や課題の検討を行い、学生トレーナー教育および学生アスリートサポートを充実させるために重要な業務である。

本稿ではRCRの記録書をもとに、2014年度の来室状況と活動を報告し、今後の展望を述べる。

2. RCRでの活動内容

1) 学生トレーナー教育

本学には教員としてATが4名在籍しており、RCR内で現場実習を行っている。具体的な実習内容として外傷・障害の予防、スポーツ現場における救急処置、測定と評価、コンディショニング、アスレティックリハビリテーション（以下、アスリハとする）、組織の運営、教育などがあげられ日本体育協会が推奨する教育内容を実践している¹⁾。

また、本学には約30名の学生トレーナーで構成される学生トレーナー部CARE（Community of Athletic training and Reconditioning Expertsの略）のクラブ活動を行う場としても運営されている。CAREに所属する学生トレーナーもAT現場実習と同様に教員の指導のもとRCRでトレーナー活動を行い、日々の学習成果を実践の場で発揮している。

2) スポーツ傷害相談活動

RCRでは学生の実習活動の一貫として、学生アスリートを対象に、スポーツ傷害相談を行っている。

スポーツ傷害相談の対象は主に以下の3つである。

①擦り傷、切り傷、捻挫、打撲などの急性の怪我

②腰痛、膝の痛み、肩の痛みなどの慢性の怪我

③その他、スポーツで発生した怪我

スポーツ傷害相談では、怪我の評価を行ない、必要に応じて（又は学生アスリートの希望に応じて）以下の対応を行っている。

①近隣の医療機関の紹介

②怪我の救急処置

③競技復帰に向けたアスリハ

④スポーツ外傷・障害の予防のためのコンディショニング

競技復帰に向けたアスリハは、医療機関において医師の診断を受けたものが対象となる。そして、アスリハの内容はその医師の指示のもと決定されたプログラムを実施している。

3. 来室状況

2014年4月から2015年3月までの1年間にRCRを来室した学生アスリートの総数は413名（男性211名、女性202名）で、新規来室傷害件数は83件（男性51件、女性32件）であった。来室者総数を月別に分類すると6月が最も多く77件、次いで7月が67件、10月が64件であった（図1）。

新規来室時の記録内容は所属クラブ、学年、傷害部位、傷害分類、来室目的である。その他、主訴や受傷機転、理学所見などを記録している。新規来室の所属クラブはラグビーが最も多く18件（22%）、次いでバスケットが17件（21%）、陸上が12件（14%）であった（図2）。学年別新規来室件数は、1回生が30件、2回生が21件、3回生が25件、4回生が7件であった（表1）。

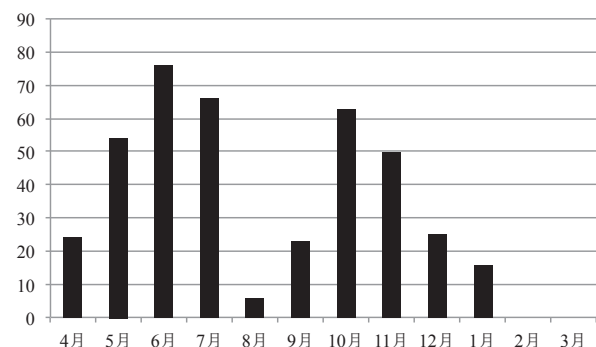


図1 月別来室者数

2014年4月から2015年3月までの1年間にRCRを来室した学生アスリートの総数を月別に分類した。

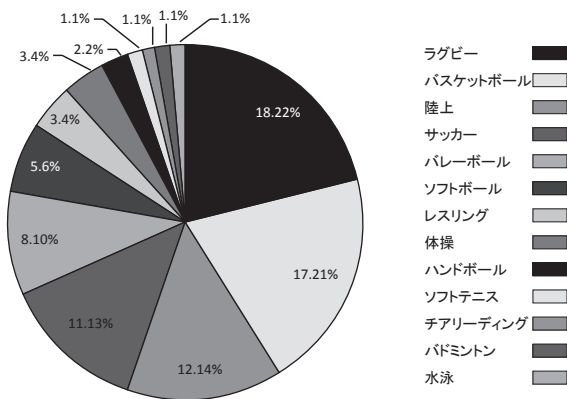


図2 新規来室の所属クラブ

新規来室の所属クラブを件数および割合で示した。

表1 学年別新規来室件数

	男	女	合計
1回生	19	11	30
2回生	11	10	21
3回生	15	10	25
4回生	6	1	7

傷害部位を上肢、下肢、体幹に分類し、手・手関節、肘関節、肩関節、足・足関節、下腿部、膝関節、大腿部、股関節、腰部、頸部に細分化した。その結果、下肢が最も多く、その中でも足・足関節が32%、次いで膝関節が30%であった(図3)。

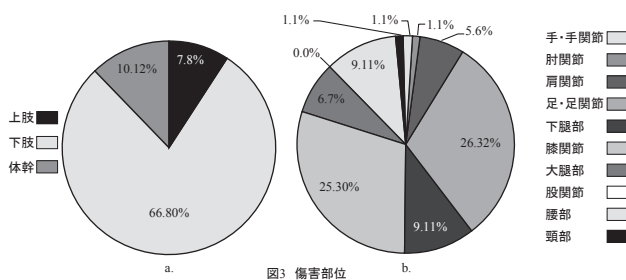


図3 傷害部位

a: 新規来室の傷害部位を上肢、下肢、体幹に分類して件数と割合を示した。
b: 新規来室の傷害部位を手・手関節、肘関節、肩関節、足・足関節、下腿部、膝関節、大腿部、股関節、腰部、頸部に分類して件数と割合を示した。

傷害分類は外傷と障害に分類すると外傷が73件(88%), 障害が10件(12%)であった(図4)。新規来室の来室目的は、アスリハ、傷害相談、医療機関の紹介、救急処置、コンディショニングに分類するとアスリハが最も多く54件(65%)、次いで傷害相談が29件

(35%), 医療機関の紹介と救急処置、コンディショニングは0件であった(図5)。

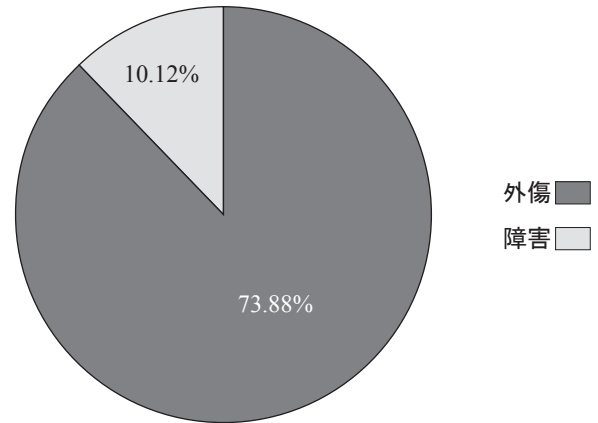


図4 傷害分類

新規来室の傷害部位を外傷、障害に分類して件数と割合を示した。

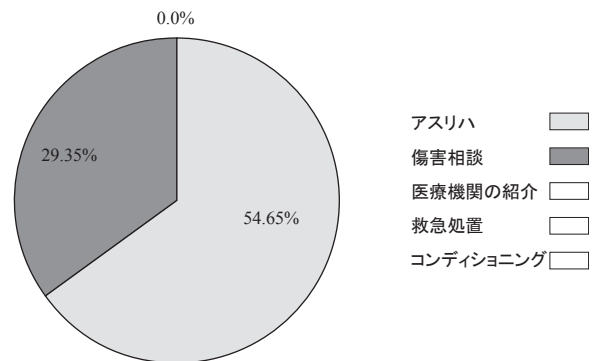


図5 新規来室の来室目的

新規来室の来室目的をアスリハ、傷害相談、医療機関の紹介、救急処置、コンディショニングに分類して件数と割合を示した。

4. 活動報告

学生トレーナー教育として、AT教員は学生アスリートが来室した際に情報収集、検査・測定、エクササイズ指導、救急処置などの補助を学生トレーナーに指示し、実践的な指導を行っている。この実習は、本学の学位授与方針にある「社会人として人と向き合えるコミュニケーション能力、および職業人としての基礎的な力を兼ね備える」ことに対して非常に重要な役割を担っている。

学生アスリートサポートとしての活動は、RCRの来室目的として最も多いアスリハの指導が中心である。

RCRにおけるアスリハは、「医療機関における理学療法プログラムと同様のエクササイズの実施」あるいは「医療機関受診後にRCRにてAT教員が作成したプログラムの実施」を行っている。アスリハは外傷後や発症後は医療機関への受診が基本となり、医師の診察結果から開始される¹⁾。また、医療機関内のみでなくスポーツ現場でのアスリハも、医師の医学的な判断を基に進行しなくてはならない²⁾。したがって、本学RCRでは、競技復帰に向けたアスリハの対象を医療機関において医師の診断を受けたものとしている。傷害が不確定な状況では、適切かつ段階的なアスリハの提供が困難なため、学生アスリートにとって大きな不利益であるとともに、様々なトラブルを招く恐れがある。単に活動方針として伝えるだけでなく、医療機関の受診を促す理由を明確に学生アスリートに伝える努力が今後も重要となる。また、アスリハは半年以上にわたり行われることも少なくないため、夏季および春季休暇にまたがってアスリハを行う学生アスリートも存在する。夏季および春季休暇期間中のRCRは完全予約制となっているため、休暇期間にまたがってアスリハを行う場合は、長期休暇前にセルフコンディショニングについて再度指導を行っている。

5. 今後の展望

2015年度は本学教員2名が日本体育協会公認AT資格を取得したことにより、日本体育協会公認ATが4名在籍することとなる。また、4名それぞれが、全米アスレティックトレーナー協会公認AT、鍼灸師、理学療法士、健康運動指導士など、多種の資格や免許を保有しており、様々な専門的視点での指導が可能となり、AT現場実習の充実度の向上が図られる。

そこで、以下の3点に関するシステムの構築が今後の重要な課題である。①「より多くの学生アスリートを受け入れられる体制作り」、②「医療機関との連携強化」、③「即戦力となる学生トレーナーの育成」。「より多くの学生アスリートを受け入れられる体制作り」には、AT教員の体制はもちろん、学生トレーナーの技能の向上は必要不可欠である。また、今後更なるサポート体制の強化を考えるのであれば、他大学のように専門職員の雇用も必要となる。「医療機関との連携強化」には、どのような連携方法を構築するのか模索しつつ、医療機関との良好な関係作りが重要となる。「即戦力となる学生トレーナーの育成」には、学びの機会を増やすことだけでなく、学びの質を向上させる

ことが要件となる。これらの課題は単年で解決できるものではないため、各年度において、対策を検討することがシステムの構築へと発展する。

また、2015年度に学生トレーナー教育において重要な行事が行われる。全国の学生トレーナーが一同に集う日本最大の学生トレーナー交流会である「学生トレーナーの集い」を、2015年3月に学生トレーナー部CAREを中心に本学において約600名の規模で開催する予定である。この「学生トレーナーの集い」は過去17回開催され、近年は約700名程度の規模で行われている。九州での開催は史上初であり、それを本学で開催できることは非常に名誉なことである。「学生トレーナーの集い」の開催という経験が、本学学生トレーナーにとって社会へ羽ばたく上で大きな糧となることを期待してやまない。

6. 参考文献

- 1) 山本利春 (2007) : アスレティックトレーナーの任務と役割, 河野一郎 (監修), 公認アスレティックトレーナー専門科目テキスト1 アスレティックトレーナーの役割, 財団法人日本体育協会, 第1版, pp29-31
- 2) 小林寛和 (2007) : アスレティックリハビリテーションの概要, 河野一郎 (監修), 公認アスレティックトレーナー専門科目テキスト7 アスレティックリハビリテーション, 財団法人日本体育協会, 第1版, p11